

日照雨



日 照 雨

佐藤春夫

講 談 社

日 照 雨

昭和28年12月10日 第1刷發行 ￥ 380

著 者 さ とつ はる き
佐 藤 春 夫

東京都文京區音羽町 8-19

發行者 野 間 省 一

東京都港區芝三田豐岡町 8

印刷者 川 口 芳 太 郎

東京都港區芝三田豐岡町 8

印刷所 圖書印刷株式會社

發行所 東京都文京區 株式會社 大日本雄辯會講談社
音羽町 3-19

落丁本・亂丁本はお取りかへいたします。 (毛利製本)

PRINTED IN JAPAN



題畫代序詩

お天氣博士は博學無識

天氣豫報はてたらめ正確

片しぐれして山は晴れ

里のお祭日照雨して

花に飽きし蝶は

蝸牛カタツムリとなり

女が腰のうねりに

匍はづひまつはり

うなだれし女

臘ろうに似て

白日夢に溶けゆく

片しぐれして山は晴れ

佐藤春夫

自 敘

日照雨は俗に云ふ「きつねのよめいり」で、陽であつて同時に陰である。照りつつ降るのは蓋し天象がそばえ（ふざけ）てゐるものと見てかく名づけたのであらう。古人の語を造るや絶妙である。「そばえる」の動詞ならびにそれを名詞とした「そばえ」は國語として現に今も關西では日常語に生きてゐる。何も奇を好んで古語や廢語を持ち出したのではない。この語に奇異を感じた人があつたら、先づわが身の物知らずを恥ちて然るべきであらう。

題名をかう念入りに解説するのは、この作品の内容の一切がこの題名の一語に盡きてゐるためである。あまりに曲もないまであけすけに題名に出てゐる。ところが、この初稿が昨年の十月に發表された際、毀譽褒貶のかまびすしかつたにもかかはらず、題名が眞に理解し得なかつたものか、この作で作者の意圖したところを知る人

は一人も無く作者は甚だ不幸であつた。

抑も、この小説は愛情の小説ではない。と云つて決して憎惡の文學でもない。照りつつ降るが如くに、この作品には愛とも憎ともつかない。——愛しつつ憎むか、乃至は憎みつつ愛するか、恐らくは一如ではなく、この背馳したものが同時に存在する筈である。さうしてこれは抒情小説であつて亦、觀念小説でもある。これらの矛盾だらけな作意は自らに凝つて一種の「てんがう書き」のそばえた文章となつて現れた。

好惡の自由、毀譽の權利は勿論すべての讀者（批評家をもこめて）にあらう。と同時に理解の義務も必ずあらうと作者は信じてゐる。尤も能力なら是非もないが、題名をさへ得解かず作意をさへ知らない人の批評などは作者を不幸にするだけで格別に毀でも譽でもない。作者は悄然として啞然たるばかりであつた。僅に作者を知る事の深い二三の舊友が作の眞意を掬して作者を勵ましてくれたので、わが作必ずしも書いて足りないのではなかつたと自信を支へ保つて世上の紛紛たる毀譽を忘れた。

それ等の友に何故の改稿かと問はれたら、初稿は捨てたのではなく第二稿と併せ存し、また更に機を得て第三稿を草する日もあらうと答へたい。このテーマは甚だ作者の氣に入つてゐるがまだ不消化な部分がある。一度は實話仕立の不自由を離れ、虚構を逞しくして書いてみたいとも思つてゐる。

作者にとつて最も滑稽に思へたのは、この作を風俗小説と解し世間話と讀んだ向のあつた事である。それ位見當が外れるなら一そメルヘンと見てほしいぐらゐなものである。更にをかしいのはよほど低能で同時によほど嫉妬ぶかい人であらう。この作に嫉妬を書かないと難じたものである。作者は偽と愚さに對する憤で一杯である。この作のどこにそんな事を書き入れる餘地があるのであらうか、感じもしない嫉妬などを。自己からの脱出のためにこれを書きはしたが、嫉妬や復讐で書いたと見るのは見る側の俗情のせるであつて、いかに未熟な作者とて他人のそんな責任までは負はない。

實話仕立でこそあれ、これを作者が世間話から引離さうとしてどれだけ苦心して

ゐるかは見る人ぞ見るであらう。

この書に併せ收めた二篇のうちの一篇「栗の花」は「日照雨」の世間話となることを惧れてはじめは作の背後に残して置いた部分を「日照雨」が既に世間話の取扱ひを受けるに及んで、これを世間話と見た向に對して、毒を以て毒を制する意味で敢て世間話を以て酬いたもので、この書にこれを附録した所以も作者のいふ世間話と文學との區別をせめては自分の讀者ぐらゐには知つて置いてもらひたかつたためである。それ故「日照雨」を喜ぶ人で「栗の花」などは無くもがなと見る向があらば亦、作者の知己の一人である。

最後に作者から讀者に願ふところは、この作に對してはあらゆる世上の先入見を捨てて素直に文字を文字として文字どほりに讀まれないといふ一事である。さもなければこの作の眞意は終に不可解に終ると思ふからである。

以上書かでもの事どもを多く記して序に代へた。

昭和二十八年十月中浣

佐藤春夫記す

目次

日照雨……………三

少年詩人……………一七五

栗の花……………二三

日^ニ

照^ス

雨^ス

抑もいかに聖なる人物でもどんな亂倫な人間でも、又肉慾といふものをどう愼しんでも、いくら亂用しても、いづれは人の子の、齊しく性の威令に懾伏しない者としては無いのである

——ルミ・ド・グウルモン「戀愛の生理」

序章

陽春狂想曲やうしゅんくらぶそでい

I

返歌なき青女房よ暮の春——蕪村

陽春二三月　月は朧朧　身は鬱鬱。

君は三十歳の豐滿な四肢に

むなしい愛の觀念を抱いて

戰死の夫ならぬ新たな春夢に哺乳するとか。

夢に仕へる清潔の幸福などと

へんな獨創的貞操觀念を妄執するものだね。

靜謐なヒステリー患者　情操の蝸牛かたつむりよ觀念の主あるじにして觀念の俘囚とりこなる君よ

君は修道女しゅどうめの如く冷く、崇高けいたく 自他を欺く

君はすがすがしくほの暖かに

君はよそよそしく秋波する

恐らく吾輩はそこが氣に入つたのだ。

君が修道女なら吾輩はきつと惡魔だね

吾輩は君を敬愛し君を飛躍させようと來た。

わが愛はいま神の惡心に燃えてゐる。

吾輩は君に現實を與へて君を開發しよう。

君が醜みにくとする現實の美を啓示しよう。

觀念の殻からぶち破つて生命の美と眞とに就け。

蓋し精神は肉體に劣り、感覺は觀念に優る。

靈と肉との交尾する時、人間そのものは、

天樂を奏でる形めでたい風簫オルゴオルである。

その生命の歌を人間は悪魔のものと云ひ、
悪魔はこれぞ神のものと云ふ（勿^{なほ}羞^{ちらひ}そ）
これは君が精神の外科手術の話なのさ。
吾輩はもとその方の老大家でね。

Ⅱ

尾州白狐譚由來記のこと——尾張民俗誌

賽^{さい}子を投げる前に

お賭けなさい

決闘ではない

心中の相談でもない

賭け物は何でもよい。

若さを よろしい。誠實を 結構。

靈を 神と悪魔との取引する額面の大きすぎる空手形だが、それも結構。

肉體を 現ナマはまた一段と珍重

だが無理はなさる勿^な、もつとお手軽なものでも。

では肉體の影を！

はあ？ ビイター・シュレミールもどきにね。

え、お好みの浪漫派の遺品^{かたみ}よ、いけない？

いや重寶。惚れた弱みに一番賭けやすい物でO・K。

さてその代りに吾輩は最も高貴なものを賭ける。

心臓を。少しくしなびては居るがまだまだ生きてゐる、

一生よく揉^{なめ}して一層よく感じる心臓を、老詩人の心臓を。

勝つて噛むなり、噛^{かじ}るなり、

チューインガムのやうにしやぶるなり、

風船玉みたいにあくらませ 揚句の果に壊すなり、

おもちゃにするには味があるよ。

またお料理にも使へます、煮ても焼いても食へるのだ。

賭は詩人の勝だつた

わが老詩人は影を抱いて心に病んだ。

毀れた袋^{バック}笛^{パイプ}のしやがれ聲で、

わが老詩人の最も高雅な心臓は吹き

日ねもす卑俗な野調を繰り返す――

笑顔ふくんでいら切つて

知らぬふりするしらばくれ

おのれ尾州^{ひしゅう}の白狐^{しろぎつね}

叩き殺してくれようか。

Ⅲ

情火タンク爆發の事

陽春二三月　月は朧朧　身は悶悶
思へば不便なり

春宵の戦争未亡人ひとり

行ひすましてぞ秋十年とと

衣食に事は缺かずとも

三十後家ともなりぬれば

小出しでは無理なり

この炎炎たる情火の蓄積槽タンク。

白い肉體の地下には埋没し切れず

——縦横無盡・複雑微妙　ガス管装置の比ならねば
チャタレイ夫人よ、勿差なはぢらひそ性の尊嚴を。